

平成 28 年度国際共同研究事業

「アジアでの防災学習コミュニティの創生から福祉文化の醸成へ；パネルシアターによる教授法開発を通して」実績報告書

日本社会事業大学 田村 真広

1. 2015 年のネパール地震

ネパール地震の本震は、2015 年 4 月 25 日（土）昼頃に起きた。マグニチュード 7.8、震源はカトマンズ北西約 80 キロだった。余震は 5 月 12 日（火）に起きた。マグニチュード 7.4、震源はカトマンズ東北東約 76 キロだった。カトマンズを含む各地で 8,600 名以上の死者及び 21,000 名以上の負傷者を出す甚大な被害（死者数・負傷者数は 5 月 27 日時点）をもたらした。各地で建造物が倒壊し、道路が寸断された。地震で被災した子どもは 110 万人で、孤児となった子どもは 80 人とされている¹。

もとよりネパールでの絶対的貧困層が全人口の 26.5%を占めていたが、震災によって 2.5～3.5%上昇した（+70～100 万人）と言われている²。

2. ネパールの教育制度

ネパールの教育制度としては、就学前の幼児教育と基礎義務教育としての 1～8 年生（小学校 5 年＋中学校 3 年）、9～10 年生としての高校がある。この上に高等教育がある。2009 年から学校改革プログラムが進行中で、10 年生と 12 年生終了時に全国統一試験が実施され進路選抜が行われる。学校の運営主体としては、国立、私立、地域住民による運営がある。国立と私立（インターナショナル・スクール）の学校に通う層には経済的な格差が見られる。私立には、裕福な家庭の子弟が通学し、英語を使用言語とし、国外の大学への留学をめざす。2010 年度に私費で海外留学した学生の数は 11,912 人で、主な留学先はイギリス、オーストラリア、アメリカ、日本であり、安価な留学先としてインド、中国が選ばれている³。

成人を含めた識字率は 60%である（15～24 歳では 80%）。就学前教育の就学率は 84%、初等教育就学率は 95%程度だが最終学年まで残るのは 70%である。中等教育就学率 60%前後である⁴。

3. 学校訪問

訪問した学校の建物の被害は小さかった。休校日の土曜日に地震が起きたことから、人的被害は無いように思われた。しかし、在宅の児童やその親族に犠牲者が出ていた。震災が貧富の差をさらに拡大した。校区には瓦礫が散乱する場所が残り、粉じんが常時舞い上がり、建築物はいまだ再建途上にあつた。手つかずで放置されている箇所も少なくなかった。学校の経営委託費は減額され、教員給与を分割支給。ボランティアによって教育を支えていた。訪問者に寄付金を求める場面が見られた。

4. パネルシアターを実施

カトマンズ市内の小学校 2 校（私立と国立）を訪問した。以下のプログラムを実施した。

1. パネルシアターの実演と制作

¹ <http://www.kaze-travel.co.jp/nktnews20150717.html>

² 日本ユニセフ協会「ネパール大地震緊急募金」など

³ ネパール教育省

⁴ ユニセフ世界子供白書 2016

2. 校長・教員との懇談

3. 制作活動、児童へのアンケートを実施（国立校のみ）

ここでは制作活動まで行った国立校でのプログラムについて報告する。3月21日、国立学校（tej binayak higher secondary school ; madhu timilsina 校長）を訪問し、約90名を対象としてプログラムを実施した。

パネルシアターは、ラポール（信頼醸成）・異文化交流・防災減災をテーマに選んだ。練習をして、ネパール語への通訳を介して、学生との協同活動によって実演した。学生及び共同研究者・田中正代による異文化交流作品の実演のあと、田村が「災害救助犬レイラ」を実演した（後掲、参考資料）。田村の実演作品は3. 1 1 東日本大震災の救出活動に携わった災害救助犬を主人公にした本を原作として、オリジナル作品として制作したものである。ネパール地震との共通点から防災・減災の教訓を児童に探究させる教材である。制作活動では、絵人形「パネタン」の制作と「わたしの宝物」を壇上で発表してもらった。発表してくれた児童を表彰し、記念品として学習ノートを贈呈した。参加者全員にプレゼントとして鉛筆・ノートを贈呈し、アンケートを実施して、プログラムは終了した。

5. アンケートの集計結果より

総数 83 票

① パネルシアターは楽しかったですか。

楽しかった 74 票 89. 2%

② 地震が起きた時、誰の言いつけに従いますか。

ママ 50 票（うちママだけ5票） パパ 46 票（うちパパだけ1票）

ママとパパ 45 票 先生 40 票

無回答 16 票

③ パネルシアターについてのリクエスト

楽しかった、良かった、またネパールに来てください、今日のゲームは楽しかった、他

6. 考察

「津波でんでんこ」を教訓とした日本に比べると、ネパールでは依存する意識が強く残っていることがうかがえる。また、「先生」よりも「父母」が上回ったのは、休日である土曜日に震災が起きたからと考えられる。

実演してわかった震災の教訓は以下の3点である。

① 日本では初期振動で机の下に身を隠して安全を確保するが、ネパールではレンガや土壁の重みを受け止めるだけの頑丈な家具が普及していない。

② それゆえに、日本では屋内で待機し揺れが収まってから避難するのに対して、ネパールでは即座に屋外の広場等へ避難する。避難誘導の方法が大きく異なってくる。

③ 日本では犬がつなぎ飼いであるのに対して、ネパールでは犬が放し飼い。犬の他に猫、牛、ヤギも放し飼いにされている。震災直後にパニックを起こした動物らによって危害を加えられた事例が多いことから、災害救助犬へのイメージが転倒しうることが示唆された。

これらの情報を参考にして防災教材内容を改訂することが今後の課題である。

【参考資料1】 パネルシアター「災害救助犬レイラ」シナリオ

2011年3月11日14時46分、東日本の沖合を震源とするマグニチュード9.0の東日本大震災が起きました。

海岸部には 10 メートル以上の津波が押し寄せたのです。
山が崩れました。家が土砂に埋もれました。
海沿いでは津波は押し寄せました。多くの家が流されました。
街並みがめっちゃめっちゃに壊れました。家の中もぐちゃぐちゃになりました。
1 万 8,400 人以上が亡くなっています。
これまでも何度か地震が起きていたので、「今回も大丈夫だろう」と考えて家の中にじっとして、けっきょく津波にのみこまれてしまった人が多かったです。
災害救助犬が岩手県金ヶ崎町にいました。名前をレイラといいます。
災害救助犬とは行方不明の人を探し出す犬のことです。
犬の訓練士は村田忍さんです。レイラのお世話をしています。とても仲良しの「二人」です。
村田さんにとってレイラは大事な存在なのです。
レイラは 8 歳シェパード犬です。嗅覚の能力は人間の 2,000 倍です。建物の下敷きになっている人々を匂いで探し出します。大切な鼻はいつも湿っている状態にします。渴いた時にはワセリンを塗ってあげます。
村田さんは獣医師という仕事をしています。普段は牛や犬などの病気を治しています。そして災害救助犬の訓練もしているのです。
震災からレイラは災害救助犬と記されたベストを着て、村田さんはオレンジ色のジャケットを着て、ヘリコプターから岩手の被災地に降りたちました。
たくさんの方が、家の下や崖崩れの下に埋まっていました。
レイラは鼻をヒクヒクさせていました。町中に壊れたものが散らばっています。いろいろなものが混じってもものすごい匂いがしています。レイラの鼻は大丈夫でしょうか。
「さぁ行こう。サーチ（さがせ!）、アップ（あがれ!）。サーチ、アップ。」
「見つけた!」 遺体を見つけると、そこに赤い旗を立てました。
レイラの足の爪の間から血がにじみ出ていました。応急のてあてをしました。
瓦礫をどけてきた村田さんの指先からも、血がにじんでいました。レイラが指先をそっとなめてくれました。
レイラが急に走り出しました。生きてる人がいる。おばあさんが 1 人うつぶせに倒れていました。
「大丈夫ですか、生きてるぞ!」
「はい、だい・じょうぶ・です」
「レイラよくやった! えらいぞ」

2015 年 4 月 25 日（土）12 時頃（現地時間）、ネパールの首都カトマンズ北西約 80 キロの地点を震源とするマグニチュード 7.8 の地震が発生しました。さらに、5 月 12 日（火）には、カトマンズ東北東約 76 キロ地点を震源とするマグニチュード 7.4 の強い余震が発生しました。カトマンズを含む各地で、8,600 名以上の死者と 21,000 名以上の負傷者を出す甚大な被害が発生しました。各所で建造物が倒壊し、道路も寸断されました。そして建物と道路の復興はいまだに終わっていません。

みなさん、地震が来たときのために、次のことを忘れないでください。レイラと村田さんからのメッセージです。

一つ目、地震が来たらずには自分の身を守りましょう。じょうぶな机の下に身を隠して大きな揺れが収まるのを待ちましょう。

二つ目、地震が来たらず勝手な行動してはいけません。先生や親など大人の言いつけを守りましょう。

三つ目、誰かが必ずあなたを助けてくれます。災害救助犬があなたを探しています。がれきで

閉じ込められたとしても、誰かが助けに来ることを信じて救出を待ちましょう。
以上の3つを忘れないでください。ネパールも日本も地震国です。再び大きな地震が起きると言われています。いつ地震が来ても、大切な命は守れるように、じゅうぶんに備えをしておきましょう。おわり

参考文献 井上こみち『災害救助犬レイラ』（講談社、2012年）

【参考資料2 学生の考察、感想より】

ネパール・スタディーツアー パネルシアター

12150036 菊島 美希

公立学校に通う子供は十分な教育を受けることができないのが現状である。今回のパネルシアターを通して、印象に残ったのは子供たちがはしゃぎながら、しかし一生懸命に参加していたことである。

学校の印象としては、恵まれた環境とは言えないと思った。こうした環境で生きる子供たちに将来必要とされるのは、生きていくためのスキルであり、日本のような自己表現等は二の次にならざるを得ないと感じた。パネルシアターといった教科書をみて学ぶ以外の機会はあまりないのではないかと思う。パネルシアターをとおしての学習は記憶に残りやすいし、実際に自分たちで作成することで想像力や表現力などを高めることにつながると思う。パネルシアターでは、絵が張り付き、動く姿や、絵の展開を見て、みんなで声をそろえての呼びかけ、歌うことで自然に楽しむことができていると思う。パネルシアターを見ている子供たちは日本の子供と同様に興味関心を抱いていたように感じた。

パネルシアターは絵本とは違い絵が動くところが魅力である。日本で、子供の教育に取り入れられている理由がよくわかる。また、自分で作成する機会は日本でもあまりないと思う。子供たちが作成している様子を見て、楽しそうであったし、個性のある配色のしかたもその子らしくていいと思った。

また、地震に関する教育をパネルシアターのような子供が肝心を持ちやすいもので伝えることで意識的な教育ができると思う。日本の教員はパネルシアターの存在を知っているから、さほど興味をひかれられないのではないかと思う。しかし、ネパールの教員はパネルシアターに関して強い関心を持ったと思う。教員自身も子供たちにとってどういう教育をしていくか考える機会になったのではないか。教員にとっても楽しい授業をするための知恵になったと思う。

日本と同様に、ネパールも地震といった災害に今後あう可能性がある国である。現に被害を受けている。日本でも避難訓練などの防災教育が行われているが、ネパールでも自身の命を守るために幼いころから防災教育を受ける必要がある。地震が起きただけではなく、津波などを伴う場合がある。日本では東日本大震災がそうであった。人間の予期せぬようなことが自然界ではあり得る。ネパールの家は耐震設備が整っていないような家屋も多く、家の中にいれば安心というわけにはいかないように思える。子供たちが、被災した時にどう行動すればいいか、パネルシアターを通して視覚から学ぶことができたのは良かったと思う。初めて見ることや、やってみることは子供にとっても、大人にとってもいい刺激になる。今回の経験が子供たちにとって、夢や知恵を与えることにつながったならいいと思う。

経済的に豊かな日本だからパネルシアターという教材を使って教育を行うことができる。パネルシアターの材料費は現地では用意するのが難しいのかもしれない。ネパールという国で、現地のものを利用したパネルシアターができれば、パネルシアターの可能性も広がるし、より現地の人を取り入れやすくなるのではないか。

はじめに

私は、ネパールでパネルシアターを2回体験した。それまでパネルシアターを一度も見たことがなかったので初めての経験だった。1回目は私立の学校で先生たちが実演しているところを見ているだけだったが2回目に公立の学校では実際に子供たちの前で実演した。今回はパネルシアターを見ているときの子どもたちの反応や実演してみて考えたこと、それらのことから考えたパネルシアターの可能性について自分なりにまとめていきたい。

1、 パネルシアターを見ているときの子どもたちの反応

今回のネパールのスタディツアーのなかでパネルシアターを2回行った。1回目は私立の学校で2回目は公立の学校である。2つの学校での共通点や相違点について考えていきたい。

どちらの学校の子どもたちも夢中になって見ていた。問いかけにも元気よく答えており、歌も一緒に大きな声で歌ってくれていた。絵が出てきたときに指をさしていたり、前のめりになってみている様子からパネルに絵が出てきたりすることを楽しみにしていることや、話を集中して聞いていることが伝わってきた。笑顔で興味津々だということが様子を見ていると伝わってきて珍しいものを見ていることに対する興味や期待を感じた。

2つの学校を比べてみて感じた相違点は、英語の理解度の差だと感じた。英語に慣れている私立学校の方は楽しんでた。公立学校の方では理解しようと必死になっている場面が何回もあった。教育の重点をおくところが同じ国でも差があることに衝撃をうけた。

2、 実演してみて考えたこと

私は今回パネルシアターを初めて実演した。とても楽しくてよい経験になったと思うが難しさや今後の課題などを含めその体験を通してなど様々なことを感じた。その中でも特にこれから考えていかなければならないことについて書いていきたい。子どもたちと楽しむために必要なことがたくさんあるということだ。大きな教室で全員に聞いてもらうためには大きな声ではっきり話すことが必要であり、注目を集めないといけない。また、実演する側の準備が十分でないとパネルシアターを見ている人たちは楽しみにくなくなってしまう。自信を持ってテンポよくやることができればもう少し場を盛り上げることができたのではないのかと感じ、これからは広い会場で大勢の聴衆がいる中ではどのような話し方が効果的なのかということや、自信を持って物事に取り組むためにはどのようなことをするべきかについて考えていきたい。また、問いかけなど周りを巻き込んで楽しんでいく工夫についても今後の学びのなかの課題になってくると思う。

3、 パネルシアターの可能性

ネパールセントラルハイスクールという私立の学校でパネルシアターを行った後に校長先生からお話をいただいた。その話からネパールの教育は教科書などの参考書をそのまま覚えることが多い。だからパネルシアターのような子どもたちと一緒に考えて作っていくわかりやすい教育方法が広まることでネパールの教育の幅が広がるのではないのかと考えた。

おわりに

パネルシアターに対して子どもたちは興味を持っていたので楽しそうにしていた。楽しんでもらうためには工夫が必要であり、問いかけや一緒に作っていくという感覚を大切にしていなければならぬことについて身をもって感じた。

最後にネパールでパネルシアターを実演できて良い経験になりました。パネルシアターを見てくださった子どもたち、ネパールの先生方、一緒に実演した先生や先輩方に感謝の気持ちがいっぱいです。ありがとうございました。

パネルシアターについて

11150002 安藤実果子

パネルシアターが始まる時、教室の中にはその学校に通っている子どもたちだけではなく、他に外部の子どもたちや大人も見学していてオープンな環境だと印象を受けた。子どもたちが生徒の子どもたちと仲良く人形作りをしているところをみて、隔てなく作業できる場所を魅力的に感じた。日本とくらべ生活水準が低いと、制服を着ている子どもと私服を着ている子どもたち、色鉛筆や消しゴムを持ってかえる子どもたちなどのように、それぞれの子どもたちがそれぞれ違う環境で育っていると感じた。また同じ年齢だとしても能力の差に違いもあったように見受けられた。教師は大人の方と同じようにパネルシアターについて興味を示していて、カメラ、ビデオに収めていた。また作業をしている子どもたちの様子を見ていた。いろいろなところを観察している様子だった。

パネルシアターには、今回実演したカレーの作り方のように料理や歴史や憲法など一見難しい内容でも絵や人形を使って分かりやすく伝えられる事と、歌をパネルシアターの中に盛り込むことができる事という特徴がある。それは子どもたちだけではなく教育を受けていない大人の方にも一緒に楽しく勉強できる場所がすごくいいポイントになると考えた。それから、まだ言葉を確実に習得していない子どもたちに対して、可視化できる材料を利用して物と言葉の一致を図ったり、また「～だから～である」のように、時の流れと物事の結末の関連性を把握させたりと、いろいろなスキルを取得できるのではないかと考えた。また日本でいう授業参加のように、自分でストーリーを考えて作成し親の前で披露することで、子供の成長を確認できる機会でもパネルシアターは利用することができるのではないかと考えた。

ネパールの教育事情をふまえてパネルシアターの活用を考える

12140098 藤澤詩歩

学校におけるパネルシアターの可能性からネパールの教育事情を考えるとき、まずインドラさんや校長先生から伺った事情をまとめると以下のとおりだった。

ネパールの学校教育はいわゆる詰め込み教育で、大学であっても理解より暗記の勉強法である。試験の成績を向上させることを重視する。学校は公立よりも私立が多い。学費の高い私立ほど教員の待遇が厚く、授業の質も良いため、家庭の経済格差が教育格差に直結する。また、高等教育機関については大学の数が少なく、海外進学する生徒も多い。そのためネパールの学校は英語教育に力を入れている。

今回の学校は国立だったが、国から給与が支払われるのは専任の教員のみであり、そこから少ずつ外部の教員の給与に回しているとのことだった。生徒たちの多くは貧困家庭の子どもであり、私立の学校に通うことができない。ただし、この学校は試験で好成績を出しており、それが評価されて公立にも関わらず人気があるとのことだった。

以上のような教育事情を踏まえると、授業の中で子どもたちがパネルシアターを作ったり演じたりすることは、教科学習の時間が減ってしまうため賛成は得づらいのではないかと考えた。ただし、教科学習の理解を深めるための補助教材として導入することは可能かもしれない。一方で、パネルシアターをどのように活用できるかどうかはともかく、子どもたちは本当に楽しそうだった。切り抜いた絵人形を嬉しそうに動かして踊らせながら歌っていた姿が印象深かった。国が違っても、人形を使ったり物語があったりする授業は、やはり子どもたちの心を捉えるのだと感じた。こどもたちには暗記ばかりの授業ではなく、そういう授業を受けてほしい。反面、高等教育機関への進学など、今後の選択肢に筆記試験の成績が直結するならば、試験を通過できる教育をすることは切実であるだろう。初等・中等教育を担う教員が教育の質に重きを置くこ

とができるようにするためには、高等教育機関の入試の形態などを多様化させていかななくてはならないのではないか。

ネパールの学校でのパネルシアター

12150058 清水 千尋

1. ネパールの学校訪問、パネルシアターから見たもの

1-1. パネルシアターに参加

21日の公立学校でのパネルシアター上映に急遽参加することになった。(練習無しの一発本番!) 演目は「日本のカレーの作り方」である。カレーの作り方の歌を歌うのだが、日本語の歌詞をネパール語にした。歌に行くまでのカレー作りは、隠し味(トマトと塩)が隠されていない、(人参、玉葱等と一緒に出した。)火を付けていないのに鍋が吹き出す、材料が鍋から落ちてくる・・・とぐずぐずだった。ネパール語のカレーの歌で何とか盛り返した。と言うよりも子ども達の反応が大変素晴らしかった。(その後のワークショップで歌を口ずさんでいる子がいた。)

子ども達との掛け合いで3つのことを感じた。①迷いを持たないこと、②問いかけはシンプルに分かりやすく、③顔は向けて大きな声ではっきりと話すことだ。①子どもは大人をよく見ている。迷いはすぐに見透かされてしまうので心の奥底にしまう。②「何」を聞いているのかははっきりさせて、シンプルにする。答えに沈黙を持たせてしまうと流れのリズムが滞ってしまう。③理想は目をみてゆっくりと話すだが、多数を相手にするときにはできない。顔を向けて、はっきりと話さないと伝わらない。

これができるば、だんだんと子ども達の様子を見て順番を替えたり、じらしたり、聞こえないふりをしたり・・・と応用編に進める。一番大切なのは自分自身も楽しみながらすることだ。

1-2. ワークショップ

子どもたちに1枚ずつPペーパーを配布。片方には絵柄(ペンギン)が描かれておりそれを自分の好きな色で塗る。もう一方には自分の宝物の絵を描いてもらう。描き終わったら、絵柄を切る。ペンギンの手を糸で止める。自分だけのパネル人形のできあがり! 色塗り初めて色塗りをするのか、緑色のクーピーでただ何度も同じところを往復させている子どもがいた。別の色のクーピーを数本差し出すと一本選び、代わりに緑色のクーピーは机に置いた。先程とは違う場所を同じように往復させている。しばらく経ち、また別の色を数本差し出した。再び選んで、同じことを繰り返した。恐らく色塗りが初めてだったのだろう。

自分の宝物を描くことになり、例えであげられたアイスクリームを描く子が何人か見受けられた。ペンギンをそのまま描く子もいた。「自分の好きな物を」と話してみた。花、木、家、家族などを描いていた。「home」と書いた文字の横には四角形の建物が描いてある。一見すると日本の高層マンションに見える。どれも近くでいつも目にするものだ。ある男の子は、スポーツカーの絵を描いていた。これはなかなか実際に目にする事ができない。パネルシアターとは関係ないが、同じ質問を物質的に恵まれている日本の子ども達、または高齢者の方々に聞いてみたらどんな答えになるのか気になった。

子どもたちが宝物を描いている間に自分は何だろうかと思い浮かべてみた。以外「家族」以外思い付かない。普段は生活のことでお金がないと生きていけないのでお金のことはよく考えるし、生活とお金は切り離せない。それを削ぎ落とすと案外自分に残ったのは単純な答えだった。

2. パネルシアター～対話と共有～

パネルシアターのユニークな点は対話と想像力の共有にある。

2-1. 対話

授業中にどきっとするのは、教壇に立つ先生の問いかけに 200 人いる学生がうんともすんとも答えない時である。(私もその一人…。) 心の中で応じたとしても空気となって伝わってはくれない。問いかけの答えは沈黙かカサカサ揺れる枯葉のような囁く声…。これは独特の授業形態なのか、私はあの沈黙が訪れる度に居心地が悪くてそわそわしている。「学校」がどんなものか私には分からないが、「学ぶ」ことは興味や関心があるから成り立つ。教科書を読めば良いなら「授業」はいらない。授業は、そこに立つ多くは「先生」と呼ばれる側、そして反対に立つ側（多くは「学生」と呼ばれる。）の相互の興味・関心で成り立っている。先生は学生に、学生は先生に関心を持つ。そこから「授業」と言う形式の知識の授与がなされる。

パネルシアターをしているときに感じたのは、子どもたちはこちらに関心を持ってきている。こちらも、子どもたちの反応を見ながら（あたふたしながら）「これは聞こうか。」「これはもう出してしまえ。」と流れを作っていく。パネルシアターの内容は、時に歌だったり、民話だったり、絵本のお話だったり、教訓だったり様々だ。そこに興味を持つ、相互の眼差しがあるから対話できる。どちらか一方にこれが欠けると対話できない。 以下略